

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月24日現在

機関番号：37701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530997

研究課題名（和文） フランス義務教育課程における国語新カリキュラムの総合的研究

研究課題名（英文） General study on the teaching of France in compulsory education

研究代表者

飯田 伸二 (IIDA Shinji)

鹿児島国際大学・国際文化学部・教授

研究者番号：60289650

研究成果の概要（和文）：

- (1) 義務教育課程における学習支援策 PPRE（教育成功のための個人プログラム）の理念と実施形態の解明
- (2) コレージュで全国的に実施されている前期中等修了試験のフランス語（＝国語）問題の網羅的研究。この作業により、義務教育課程修了時にフランスではどのようなフランス語の学力が求められているのかを解明した
- (3) 1925年に施行された前期中等教育国語（フランス語）カリキュラムの特色の解明。特にフランス語と古典語学習の関係、作文、文学、外国文学の学習について
- (4) 1938年に施行された前期中等教育国語（フランス語）カリキュラムの特色の解明。特にフランス語と古典語学習の関係、作文、文学史、初等教育との連絡について
- (5) 《共通基礎知識・技能》における人文主義的教養の意義の解明
- (6) 2010年に実施された小学校（2年生、5年生＝最終学年が対象）全国学力評価テストの翻訳
- (7) コレージュのフランス語に導入された美術史教育の意義と、教科書に構成に及ぼした影響の解明
- (8) 初等、中等教育の教科書収集（フランス語、地理・歴史、哲学）

研究成果の概要（英文）：

- (1) Analysis of the philosophy and the implemental conditions of PPRE, the individual program for educational success, schooling support intended for students in difficulties of learning
- (2) Comprehensive study of the collection of French language exams, implemented nationwide in the secondary schools in France. As a result, the required scholastic ability levels for French language in order that one finish the compulsory education in France has been clarified.
- (3) Elucidation of the specifications in the curriculum of French implemented in 1925, concerning relation between French learning and ancient languages, composition, study of French and foreign literature
- (4) Elucidation of the specifications in the curriculum of French implemented in 1938, concerning relation between French learning and ancient languages, composition, study of literary history and foreign literature, connection with Primary education
- (5) Elucidation of significances of humanities in the « common core of knowledge and skills (le socle commun de connaissances et de competences) »
- (6) Translation of National Assessment of French, conducted in 2010 for elementary schoolchildren (2ed year and fifth=Senior year)
- (7) Elucidation of significances of introduction of the art history in teaching French in Junior High Schools
- (8) Collecting textbooks for elementary school education and secondary education (French,

Geography-History, Philosophy)

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学，教科教育学

キーワード：国語教育，義務教育課程，文学教育，フランス，科目教育

1. 研究開始当初の背景

コレッジの旧カリキュラム(1996年に第1学年から段階的に施行)については、すでにいくつかの研究が発表されている。たとえば、フランス教育課程改革研究会による国語指導要領の全訳がある。本研究代表者も、1) 旧カリキュラムの理念に関する研究、2) 旧カリキュラムのコレッジ最終学年への施行(1999年)を機にその内容・形式が根本的に改訂された前期中等教育修了試験(国語)の翻訳、3) 教科書の内容分析や日本の教科書との比較、などを行ってきた。

一方、新カリキュラムに関する研究は、2009年9月施行という事情から、研究開始当初の段階では、ほとんど行われていなかった。わずかに、研究代表者による、旧カリキュラムと新カリキュラムの相違点の明確にし、カリキュラム改訂の背景を素描した研究が確認できるのみであった。小学校の国語教育については、1990年代以降の動向について注目すべき研究は確認できていない。

また、フランスにおいては、初等・中等教育における国語教育は一変しつつある。その要因の一つに、コレッジのあり方の根本的な変容が指摘できる。フランスでは、歴史的な理由から中・高教育を一つのまとまった組

織と見なす傾向が強い。そのため、長らくコレッジは大学入学資格試験(バカロレア)を準備する中等教育の一環と位置づけられてきた。つまり、コレッジの役割は、上級学校であるリセとバカロレアとの関係において定義されてきたのである。

しかし、1990年代半ばよりコレッジを義務教育課程の一貫としてとらえる認識が色濃く政策に反映されるようになる。事実、旧カリキュラムの重要な歴史的意義の一つは、初めて小学校との組織的連携を謳った点にあった。

この傾向の集大成とも呼べるのが、2006年7月に公布された「共通基礎知識・技能」である。これは、社会生活を営む上で、全ての個人が義務教育課程で修得すべき知識・技能を網羅したものである。つまり、この「共通基礎知識・技能」は、1970年代半ばからコレッジが小学校を卒業した全ての子どもを受け入れるようになって以来、絶えず問われてきた「コレッジはどんな教養を授けるべきか」という問いに対する行政側からの答えと位置づけることができるのである。以後、小学校およびコレッジのカリキュラムは、「共通基礎知識・技能」に準拠して構想され

ることになる。コレッジ最終学年の生徒を対象に実施されている「前期中等教育修了試験」も、2010年からは「共通基礎知識・技能」に準拠して実施される。

つまり、2008年からの小学校新カリキュラム、2009年のコレッジの新カリキュラムは、フランスの全児童・生徒による「共通基礎知識・技能」修得を目指して構想された最初のカリキュラムなのである。それゆえ、フランスではどのようなリテラシーを目指しているのか、そのために義務教育課程を通じどのような国語教育が構想・実践されているかを理解することは、フランスの教育制度研究にとって緊急の課題である。同時に、日本における国語教育の今後のあり方を展望する上でもきわめて意義深い研究課題である。

2. 研究の目的

上記のような背景から出発して、本研究の課題を以下の3点に絞る。また本研究は平成21年度まで科研費を受託して、研究代表者が遂行した研究の幅を広げ（コレッジから義務教育課程へ）、継承することを図るものである。

I：カリキュラム分析

それぞれの学年・学習期（コレッジでは学年ごとにカリキュラムが作成されるのに対し、小学校では2～3学年をまとめた学習期ごとに作成される）で、学習項目の配置は、新・旧カリキュラムの間で大きく異なっている。文法、語彙、綴り字、書くこと、読むことといった分野で見られる重要な変更点を精査し、分析する。この作業により、新カリキュラムの方向性を、精確に記述する。

これと平行して、過去のカリキュラムの理念、変遷の分析を継続的に行う。現行カリキュラムおよび近年の改革を歴史的、多角的に理解するためである。

II：試験問題分析による具体的リテラシー把握

前期中等教育修了試験の内容・実施形式を仔細に分析することで、義務教育課程終了時求められる国語リテラシー、文学的教養を詳細かつ具体的に明らかにする。一方、初等教育ではこれに相当するような試験は実施されていない。そこで、小学校第2学年、第5学年（最終学年）で、全生徒を対象にフランス語と数学について実施されている全国学力評価テストのフランス語を抽出し、分析する。

これらの作業を通じ、義務教育課程の各段階で求められるリテラシーの実態を解明する。

III：教科書の収集、内容・構成の分析

フランスには教科書の使用義務がない。検定制度もない。また、教員用の指導書も日本のそれとは比較にならないほど簡素である。教員の教科書への依存が、日本に比べて遥かに小さいのである。国語教育では特にこの傾向が顕著である。以上の理由から、日本ではこれまで教科書分析が軽視されてきた。だが、教員が授業計画を構想し、日々の授業を準備・実践する上で教科書が重要なツールである事実には変わりはない。それ故、研究期間中に、教科書がどのような作品を教材として採録し、それを基に生徒・児童にどのような問題・課題を設定しているのか、また、それらの問題・課題が日本の教科書とはどう異なるのかを検討する。

3. 研究の方法

本研究では、インタビュー調査から得られる現場教員の証言・知見に重きを置きながらも、資料収集と資料分析を最重要視する。現地で行政サイド、現場の教授団・生徒・保護者の率直な意見を聞き、教育の実践に触れる

意義については贅言を要すまい。だが、研究を当事者の意見の受け売りに終わらせないためには、現地の証言を〈知〉のフィルターにかけることが不可欠である。そして、そのフィルターは資料を読み解くことによってしか得られない。また、資料の読解にあたっては、フランスの教育制度の中でその意義・機能を大きく変えつつある義務教育課程とフランス現代社会との関係というマクロなコンテクストにおいて分析することに特に留意する。

新・旧カリキュラムの比較照合

小学校、およびコレッジの新・旧カリキュラムの比較照合作業を行う。具体的には小学校では 2002 年と 2008 年のカリキュラム、コレッジでは 1996 年のカリキュラムと 2009 年のカリキュラムの比較照合が課題となる。この作業を通じ、フランスにおける現在の義務教育課程における国語教育の方向性、それが目指す国語力・文学的教養のあらましを把握する。

同時にカリキュラム分析に歴史的視点・問題意識を導入するため、20 世紀初頭にまで遡って、過去のカリキュラム、教員用指導書の分析を継続的に行う。

教科書の収集・分析

研究最終年度である平成 24 年度までには、主要教科書会社（6 社）による小学校用新カリキュラム対応教科書の多くが出揃う予定である。コレッジでも新カリキュラム対応の教科書が最終学年まで出揃う。これらの教科書を予算が許す限り、網羅的に収集し、その内容、構成について分析する。

資料収集・インタビュー調査

春期休暇を利用して、フランスで資料を収集し、現地の関係者（教員、視学官、教員養成大学校教員）にインタビュー調査を実施す

る。資料収集の目的は戦後の国語教育に関する資料を収集し、現在の国語教育をより歴史的コンテクストにおいて理解するためである。

また、インタビューにより、新カリキュラムの教育現場への定着具合、新たな形式で実施される前期中等教育修了試験が及ぼす教育実践への影響などを調査する。資料収集は国立教育研究所附属図書館（リヨン）で行う。インタビュー調査は数年来インタビュー調査を行っているボルドー大学区、同大学区内の教員養成大学、リシャール・ルノワール・コレッジなどを予定している。

4. 研究成果

義務教育課程の最終段階であるコレッジ第 4 学年（＝最終学年）の学年末に実施されている前期中等教育修了認定試験（以下「ブルヴェ試験」）で出題された問題について、実施要項および過去 10 年間に出版された問題を分析した。分析に際しては、日本の公立高校の入試問題との比較も行った。その結果、以下のような点が明らかになった。

- 1) 日本の高校入試と比較して、解答時間が長い（約 3 時間）にもかかわらず、出題される文章の量がきわめて少ない（2～30 行の文章が一文のみ）。
- 2) 行政側は問題文を多様化させるよう教育現場に促しているにもかかわらず、実際には文学テキスト（特に小説）しか出題されていない。
- 3) 2) の帰結として、説明文、評論文は全く出題されない。
- 4) 問題も、登場人物の心理を選択肢の中から選ばせる問題が多い日本の高校入試とは対照的に、登場人物の心理を実体視するような問題が出題されることは稀である。

5) 一方、文章の構造、使われている比喻表現の体系的性、話者と物語世界との関係など、日本では大学でようやく取り扱うような問題が頻繁に出題されている。

以上の結果から、多くの文章の大意を短時間でつかむことが、日本型の国語リテラシーとするなら、短い文章を、その構造にまで踏み込んで読み込み、分析できることがフランス型のリテラシーであると結論づけることができる。

教科書の収集については、コレージュのフランス語教科書を体系的に収集した。同時にコレージュ地歴、小学校のフランス語、リセの文学、哲学、ラテン語、ギリシャ語の収集も行い、現在市場に出回っているほぼ全ての教科書を収集できた。1990年代半ば以降の、初等・中等教育におけるフランス語および人文系科目の教科書については、国内でも有数のコレクションであると自負できる。

また、近年のコレージュのカリキュラム・教科書でホメロスの諸作品どのように扱われているかを調査することで、古代語学習が衰退する中、現代国語の授業がどのように古代文明の伝達に寄与するようになったのか、その経緯を記述した。

さらに第6年級の教科書で美術史教育がどのように編成されているのかを考察した。

2009年度から小学校、コレージュで一斉に導入された横断的科目である美術史教育が、コレージュのフランス語に与える影響を把握するためである。調査の結果、美術史教育導入の影響が明確に読み取れる教科書は少数であった。これは以下の、2つの利用で説明できると考えられる。

1) 「美術史教育」導入以前の1985年のカリキュラム以来、コレージュのフランス語には「イメージの読解」という学習項目が既に導入されていた。

2) 「美術史教育」導入の狙いが、既存の科目のあり方そのものを改変するよりも、科目間の連携・強力を強化することで、教員の意識改革に資することにあった。

カリキュラム分析については、フランスの義務教育課程で求められる国語リテラシーが、「共通基礎知識・技能」の総体の中で占める位置を考察した。「共通基礎知識・技能」とは、社会生活を送る上で不可欠で、義務教育課程修了時に全生徒が修得すべき知識・技能の総体を指す。

フランスの国語教育は、文学の学習に大きな重要性を付与してきたとされるが、この伝統の実態を義務教育課程において求められる基礎学力との関連において検証したのである。具体的には「共通基礎知識・技能」の中で、人文学的教養がどのように定義、位置づけられているのかを分析した。

結果として、人文学的教養の内容が1960年以降大きく変化したことが明らかとなった。この時期以降、人文学的教養はたんに古代語・古代文化に対する専門的な知識・教養に留まらなくなった。現代社会を理解するための、語学、文学、歴史、地理の知識および、古典を含む多様な文学、芸術、映画作品についての知識をカバーする幅広い知識・教養を指すようになったのである。

そして、現代的な意味での人文学教養においても、言語に習熟し、多数の文学作品に接し、解釈することが重視されていることが確認できた。フランスにおいては、文学教育は現代の学校社会においてもなお重要な位置を占め続けており、この点が他のヨーロッパ連合諸国と比べた場合のフランスの注目すべき特色を形成している。

初等教育の分野では、フランスの小学校教育に求められる国語リテラシーを具体的に考察すべく、2010年には小学校第2学年および、

第5学年（小学校最終学年）を対象に実施された、全国小学校学力テストの国語にかんする問題を全訳した。第2学年ではフィクション＝物語が中心だが、第5学年ではフィクションと資料文がバランスよく設定されていることが明らかとなった。中等教育における国語教育のコーパスは文学作品にほぼ限定されるのが一般的であるだけに、これは意外な結果であった。

今日のフランス語教育を歴史的なコンテキストから考察する準備として、20世紀初頭（1925年、1938年）のコレージュカリキュラムの分析を行った。19世紀末～20世紀初頭の近代国家に措ける母国語教育では、国民的アイデンティティーの形成、愛国心の涵養が重視される、というのが一般的な理解であった。1925年、1938年のカリキュラムでも、もちろんそうした側面は確認できる。だが、カリキュラム及び指導書の分析から、当時の母国語教育では、翻訳および原語によって外国語文学を理解することも、重要な学習目標であったことが発見できた

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ① 飯田伸二、「フランス全国小学校学力テスト：2010年、フランス語」、『国際文化学部論集』（鹿児島国際大学）、査読無、13巻4号、2013年3月、331-363頁
- ② 飯田伸二、「刷新と伝統のはざままで：1938年男子コレージュ用フランス語指導書をめぐって」、『Stella』、査読有、31号、2012年12月、11-30頁
- ③ 飯田伸二、「現代フランス語義務教育課程におけるユマニテ：古代語学習なき時代の人文的教養とは」、『国際文化学部論集』（鹿児島国際大学）、査読無、13巻2号、

2012年9月、91-108頁

- ④ 飯田伸二、「フランス語・文学教育の新局面：1925年カリキュラム指導書をめぐって」、『Stella』査読有、30号、2011年12月、63-85頁
- ⑤ 飯田伸二、「ブルヴェ試験のフランス語：義務教育課程修了に必要なリテラシーとは」、『国際文化学部紀要』（鹿児島国際大学）、査読無、12巻2号、2011年9月、83-109頁
- ⑥ 飯田伸二、「イヴ・シトン『読解・解釈・現在化』」、『Stella』、査読有、29号、2010年12月、95-101頁

〔学会発表〕（計3件）

- ① 飯田伸二、「コレージュにおける芸術史教育：コレージュのフランス語教科書の事例から」、日仏教育学会、2011年11月13日、関西大学
- ② 飯田伸二、「中学生が読むホメロス」、フランス教育学会、2011年9月11日、武庫川女子大学
- ③ 飯田伸二、「ブルヴェ試験（前期中等教育修了試験）の国語：義務教育課程で求められる国語力」、フランス教育学会、2010年9月12日、文教大学

6. 研究組織

- (1)研究代表者
飯田 伸二 (Shinji IIDA)
鹿児島国際大学・国際文化学部・教授
研究者番号：60289650
- (2)研究分担者
該当者なし
- (3)連携研究者
該当者なし